

思いもよらぬこと

ながれ

末次 聡子 (すえつぐ さとこ/京都市左京区在住)

最近、「思いもよらぬこと」が家族にいい流れを作ってくれた出来事があった。次男10歳が地域の野球チームに所属することになり、育児に費やす時間をあまり持てなかった夫がコーチを務めることになったり、毎日バットを振る次男を見た長男12歳が「努力ってものはこうやってするもんだな」と、自らラグビーの自主練を積極的にするようになった。何が引き金になるのかわからない、そんなことを考えさせられる出来事だった。私はこの「思いもよらぬこと」が持つ可能性に今、とても関心を寄せている。

同じような事を、春から参加している『食の会議』で経験している。食の会議では参加者の皆さんからミクロな話題からマクロな話題まで、さまざまな意見が提案される。(内容は前号の藤村コノエさんによる図表を参照いただきたい。) その中で、私のメンター、ロールモデルのお三方、藤村コノエさん、許斐喜久子さん、工藤泰子さんのお話がとても面白い。私の考えるお三方の考えの共通点は「視点の転換」である。

「視点の転換」とは、過去に参加したプロジェクト『OpenTeamScience(オープンチームサイエンス)』が提案している問題解決のための方法論の一つである。英語では『transcend』と表記し、もとは、平和学で提唱されている概念であり馴染みのある方も多いのではないと思う。(1)

藤村さん、許斐さん、工藤さんのご発言のキーワードは「孤独」「貧困」「炊き出し」「子ども食堂」「自給自足」「生きがい」などである。環境文明21がこれまで提案してきた、社会的つながりを形成し、一人一人が

生き甲斐を持ち精神的に豊かで健康的かつ環境に優しい社会「人間環境社会」の形成を目指すことが、『副次的』に食の問題を解決することにつながるのではないかという「視点の転換」を提案している、そんな話のように理解した。例えば、人や社会とのつながりを持つことが「食」に関する関心を高めることかもしれないし、誰かの生きがいを育むことが自給率をあげることに貢献するかもしれない。言い換えれば、「風が吹けば桶屋が儲かる」、「バタフライ効果」(2)を恣意的に社会システムとして発生させるということであるかもしれない。

今年に入り、訳8,000キロ離れたウクライナで起こっている悲劇に対し強い憤りを感じ何もできない自分に落胆したり、最近発生した元首相の銃撃事件に衝撃を受け、「私の住む世界は平和で穏やかな社会である」と信じてきたマインドセットを変えざるを得なかった。しかし、塞ぎ込んではいられない。「思いもよらぬこと」が流れを好転させるきっかけになることがあるはずだ。それは些細なことの積み重ねであることは間違いなさそうだ。私自身が、変化を生み出せる1匹の蝶になれるよう日々を過ごしていきたい。

(1)「総合地球環境学研究所オープンチームサイエンスプロジェクト(2021)オープンチームサイエンス・メソッドについて。」より引用 <https://openteamscience.jp/method/> (2022年7月10日アクセス)

(2)アメリカの数学者・気象学者のエドワード・ノートン・ローレンツによる「予測可能性：ブラジルの1匹の蝶の羽ばたきはテキサスで竜巻を引き起こすか？」という学説